

國學院大學学術情報リポジトリ

『山海経』 佚文考

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松田, 稔, Matsuda, Minoru メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000205

『山海経』 佚文考

松田 稔

一. はじめに

中国の神話的伝承を多く記し留めている『山海経』は、その成書の時期も、また携った人物についても未詳である。古來地理書の扱いを多く受けたように、内容の多くは地理的事項であるが、そこに伝えられている内容は殷など古代の思考に基づくものもあり、先秦の古書と称され、貴重な書物である。古代の人々の素朴な思いを知るべく調査を重ねているが、現在伝えられている『山海経』の記述が、成書時の原『山海経』とどれ程

差異をもつものであるのかを知るべく、唐宋の類書や諸文献に引用される『山海経』の記述を調査した結果、「山海経曰」として引用されるが現『山海経』に見出し得ない記述が五三条あった。対象とした書物は次の七文献である。

後漢	王充	(二七—一〇〇?)	『論衡』
北魏	酈道元	(?—五二七)	『水経注』
隋唐	虞世南	(五五八—六三八)	『北堂書鈔』
唐	歐陽詢	(五五七—六四二)	『芸文類聚』
唐	徐堅	(六五九—七二九)	『初学記』
唐	白居易	(七七二—八四六)	『白氏六帖』

宋 李昉ら（太宗の命、九八三）『太平御覽』
それぞれの文献の調査において、佚文かと思われる表現を、
後に他の書物との比較を試みることとして保留してきたものを、
本稿は総合して考察を加えることを目的としている。

二 諸文献中の佚文

後漢の『論衡』には『山海經』の文章を引用する所が五か所
あるが、その中二条が現『山海經』に確認できない。

1. 董仲舒睹重常之鳥、劉子政曉式負之尸、皆見山海經。
（別通篇）
2. 山海經又曰、滄海之中、有度朔之山。上有大桃木、其
屈蟠三千里、其枝間東北曰鬼門、万鬼所出入也。上有
二神人、一曰神荼、一曰鬱壘、主閔領万鬼。惡害之
鬼、執以葦索、而以食虎。於是黃帝乃作礼、以時驅
之、立大桃人、門戸画神荼鬱壘与虎、懸葦索、以禦凶
魅。（訂鬼篇）

次に漢の桑欽著と伝えられる地理書『水経』に、北魏の酈道

元が注を施した『水経注』に『山海經』と関わる記載は九三条
ある。うち明確に『山海經』を引用し、簡略化はあるものの表
現が対応するもの七五例、更に明確に文章は対応しないものの
指摘している事項が現『山海經』に見出せるものが一二例。そ
してあと六例は、水経の何々は『山海經』の是々に当るとい
形で示され、現『山海經』に相当する記述のあるものである。
従つて全て河川の記述であるが、本稿の検討対象からは除外し
てよいものである。

『北堂書鈔』は、隋の秘書郎虞世南が、詩文の典故となる語
を、宮中所蔵の図書から摘出して分類配列したもので、現行本
では一九部八五一類からなる。中で『山海經』に関わる記載
は、郭璞の注と図讃を五条、書名としての『山海經』が一条あ
るのを含めて、計四九条ある。そのうち二条が現『山海經』に
見出し得ない。

1. 鯪鯉吞舟——山海經云、鯪鯉吞舟、魚背腹有刺、如三角
菱。（舟、舟）
2. 天酒——山海經云、東南荒山有銅頭鉄額兵。日飲天酒三
斗。天酒甘露也。（天、露）

『芸文類聚』は、唐の歐陽詢らが高祖李淵の命により編纂した類書で、四六部のうち二六部にわたり一二八条、『山海経』が引用されている。中で八条が現『山海経』に見出し得ない。

1. 列歛雷名。(天、電)
2. 反舌国、其人反舌。(人、舌)
3. 菖蒲一十九節、韓終王興所服。然而此過之、有足珍也。(葉、菖)
4. 桃樹屈蟠三千里。(葉、桃)
5. 所謂賁禺之桂。(木、桂)
6. 桂生南隅、拔萃岑嶺。広熙葩陵、霜秀津穎。氣王百葉、森然雲挺。(木、桂)
7. 蛟似龍蛇而小頭細頸。頸有白嬰。大者十数围。卵生子如一二斛瓮、能吞人。(鱗、蛟)
8. 朱蟻、其状如蟻、在崑崙墟。(虫、蟻)

『初学記』は、唐の徐堅らが玄宗皇帝の命により編んだ類書で、二三部、三二三類からなる。中で引用される『山海経』は五一類にわたり、総計八九条ある。そのうち八条は現『山海

経』にその文を見出すことができない。

1. 山海経曰、崑崙山縦広万里、高万一千里。去嵩山五万里。有青河白河赤河黑河環其墟。其白水出其東北陬、屈向東南流、为中国河。河百里一小曲、千里一大曲。発源及入中国、大率常然。(地、河)
2. 山海経、三江者大江中江北江也。文山郡有岷山、大江所出。峡山中江所出、東注大江。岷山北江所出、東注大江。其源皆在蜀也。(地、江)
3. 山海経曰、丹山西即巫山也。帝女居焉。(人、美婦人)
4. 山海経曰、雲山之上、其美乾腊。(果、梅)
5. 山海経曰、東海有山、名度朔山。有大桃実、握盤三千里。曰、蟠桃。(果、桃)
6. 山海経曰、鰕魚大口而細鱗、有斑彩。(鱗、魚)
7. 鯉魚赤目赤鬣者、食之殺人。(鱗、魚)
8. 鰈魚背腹皆有刺、如三角菱。(鱗、魚)

7・8は、6の文に続けて挙げられているものである。

『白氏六帖』は、唐の白居易の手になるもので、『白孔六帖』

に引用する冒頭の語に、「白何何」と白の字を冠して挙げ、他の語を続けるものを用いた。一三九九項目のうち、三〇項にわたり『山海經』に関わる表現を指摘できる。その多くは南宋の晁公武の注が『山海經』の表現であると指摘するものであるが、若干筆者が追加したものを含めて四一例ある。うち現『山海經』に見えない記述が三例ある。

1. 九曲——河出崑崙、千里一曲、九曲入海。
2. 千斤——猫猪大者肉重千斤。
3. 騶虞如虎五色、其間尾長如身。亦出鳥鼠同穴山。

『太平御覽』一千卷は、北宋の太平興国二年（九七七）に李昉らが太宗の命を受けて編纂した類書で、九八三年に完成している。引用された書物は一六六〇種に及ぶ大部なものであるが、五五部門のうち四〇部に『山海經』が引かれている。「山海經曰」として引用される文章中、現『山海經』に見出せないものが三〇例ある。

1. 扶陽之山多怪風。（天九、風）
2. 大極山東有温水湯風、不可過也。（天九、風）

3. 將陽之山多怪雨。（天一〇、雨）
4. 周穆王周歷四荒名山大川、靡不登躋。東昇天夫之堂、西宴王母之廬。（地三、叙山）
5. 周穆王至崑崙之丘、遊軒轅之宮、眺鍾山之嶺、勒石西王母之山、紀迹玄圃之上。（地三、崑崙山）
6. 祭水源伏流三百余里。漢武帝遣殿上將軍戴生之此山採仙藥、遂得道不返。（地八、武當山）
7. 湯山湯水出焉。此湯能愈疾、為天下最。（地一〇、湯山）
8. 大翻山小翻山有王仲廟。仲字次仲。年小入学而遠、常先到。其師恠之謂不歸。使人候焉、実在家。等輩常見次仲捉一小棘木長三尺余。至著屋間欲取、輒不見。及年弱冠變蒼頡旧文為今隸書。秦始皇時官務繁多、次仲為文簡略。赴急用之大嘉使徵不至。始皇大怒詔檻車送之、次仲吟詠化為大鳥、出車外、翻然高飛、徘徊長引至于西門山、落二翻、因名之也。（地一〇、大翻山小翻山）
9. 崑崙山縱広万里、高万一千里。去嵩山五万里。有青河白河赤河黑河環其墟。其白水出其東北陬、屈向東南流。為中国河、河百里一小曲、千里一大曲。發源及中

- 国大率常然。東流潛行地下至規期山。北流分為兩源。一出慈嶺、一出于闐其河復合東注蒲昌海、復潛行地下南出積石山。(以下八〇字略) (地二六、河)
- 10 又曰、詩云。瞻彼淇澳、綠竹猗猗。(地二九、淇水)
- 11 解縣南有壇道山、山下有水、潛出停而不流。俗為鴛漿水。發于上而潛于下。厥頂方平、有良藥。(地二九、鴛漿水)
- 12 金玉是出。亦沮水之所導也。(地三〇、沮水)
- 13 甘松嶺亦謂之松桑嶺。江水發源於此。(州郡一二、松州)
- 14 汲郡冢中得銅劍一枚、長三尺五寸。今所名干將。劍明古者通。以錫銅為兵器。(兵七五、劍下)
- 15 反舌国、其人反舌。一曰交。(人事八、舌)
- 16 野人国、面目手足尽異。(人事一一、手)
- 17 明明崑崙玄圃、其上穆天子勒銘於玄圃、以昭後世。天子与王母觴於瑤池之上。王母為謠、白雲在天。於是天子升于崦嵫、乃紀迹於崦山。(道一四、仙經)
- 18 域有山者、域有民之国。食桑射蜮是食。(四夷一一、南蛮六)
- 19 珥二玉相合。瑁琉夷蛮係耳玉也。(珍宝四、玉下)
- 20 克光之山。(珍宝二二、鉄)
- 21 猫大者肉重千万斤、豪猪。(獸一四、豕)
- 22 果然獸似獼猴、以名自呼聲。蒼黑群行。老者在前少者在後、得果食輒与老者、似有義焉。交趾諸山有之。猿人射之、以其毛為裘蓐、其温煖。(獸二一、果然)
- 23 漆光之山獸名獬。(獸二五、獬)
- 24 獬豸獸食猛獸。(獸二五、獬豸)
- 25 鷲雉一名山雞、養之積火。(羽族五、雞)
- 26 鸚鵡慧鳥栖林啄藥、四指中分、行則啄地。(羽族一一、鸚鵡)
- 27 鰈魚吞舟。(鱗介一〇、鰈魚)
- 28 单狐之山、其木多机。(木一〇、机)
- 29 楠樹生蜀中、七八月吐穗、成有塩梅、粉可以酢羹。(木一〇、楠)
- 30 竹生花、其年便枯。竹六十年一易根。易根必結。結実而枯死。実落土復生六年、還成町。(木一〇、竹上)
- 以上のように諸書籍に『山海経』にあるとして引用されるもので、現『山海経』にその記述を見出せないものが、合計五三条ある。後にそれらを内容別に検討するが、それに先立つて、

現『山海經』の構成や文章表現の特色について見ておきたい。

三 山経の記述法の特徴

『山海經』は、洛陽を中心とする五地域を記し、山経と称される部分と、その外側の地域を記す海外経四編、海内経四編、及び海外海内と重なりながら更に外側と考えられる大荒経四編、海内経一編、これらを総称して海経と称する部分との計一八編が、現行本の編成である。山経と海経は、それぞれに特色ある内容をほぼ一定の型に則って記述している。それは集められた各地の地理的伝承を、意図をもって統一し記録した記載者の筆力を感じさせるものである。すでに他の機会で概略を一部示したことがあるが、考察上の必要から更に詳細に、その記述法の特徴を示すこととする。

前半三分の二の分量を占める山経は、洛陽を中心とする西北東中の五地域を、南山経・西山経等々として、そのそれぞれにおいて三又は四の山系山脈毎に、まず前の山との距離を里数によって示し、山名とその山に存する動物植物鉱物、及びその山の特色とそこから流出する河川名、河中の動物とその流入する河川名を、次々と記し、その山系の最末尾にそれらの山岳の

神状と山岳祭祀法を記す。

山経部分の記載が型としてどのように典型化できるかの一例を示す。

A 前山の距離
又東三百七十里 B 山名
曰柶陽之山。 C 一般的産物
其陽多赤金、其陰多白金。
D 山岳の特記
有獸焉 E 特産する産物
其状如馬而白首、其文如虎而赤尾。
E2 鳴声
其音如謠、 E3 名称
其名曰鹿蜀。 E4 医療呪術的効能
佩之宜子孫。 F 流出する河川名
怪水出焉、 F1 産物
而東流注于憲翼之水。 F2 河中の動物
其状如龜而鳥首虺尾。 F2イ 名称
其名曰旋龜、 F2ウ 鳴声
其音如判木。 F2エ 医療呪術的効能
佩之不聾、可以為底。 (南山首経)

山経の冒頭、南山経の書き出しは、「南山経之首曰離山」で始まり、その山系毎に山岳の位置を列挙していく。Aの「又東三百七十里」と前山との方角・距離を挙げて、当該山岳の記述にはいっていく。「又」の字は省略されることがある。この部分が「北山行四百里」「西水行五百里」と変化はあっても、方位・距離の記述として共通するものである。類書に引用される

際は不要のものとして全て省略されている。次にB山名は「曰
杻陽之山」の形で示され例外はない。諸書に引用される際は
「曰」が省かれて、引用文の主題になることが多い。C産出物
は、「其陽・其陰」「其上・其下」や「其」を欠いたり、「多
何々」と変化はあるも、特別の説明を要しない、よく知られた
動物・植物・鉱物を記していく。「無草木」もこの項の記述と
なる。

D山岳の特記は、例文では欠けていたが、当該山岳の他と異
なる伝承を記すところである。この項に記されるものの多く
は、山容の異形と神格の記載であって、『山海経』の特色とな
る古代からの伝承を伝える貴重な内容である。「又西六十里曰
太華之山。削成而四方。其高五千仞、其广千里。」(西山首經)
「又西二百五十里曰玉山。是西王母所居也。西王母其状如人豹
尾、虎齒而善嘯。蓬髮戴勝。是司天之厲及五殘。」(西次三經)
の類である。

E特筆する産出物は、Cのような一般的な動植物、鉱物では
なく、特記すべき存在として詳述している部分である。内容
は、形状・鳴き声・呼び名、及び呪術的医薬的効能にわたる。
この呪医的効能もまた『山海経』の貴重な記録となっているも
のである。続いて多くの条項で、山岳から流出するF河川の記

載がある。河川名とその流域、河川中の動物類が記され、その
動物の形状・名称・鳴き声と、呪術的医薬的効能の記述がなさ
れる。この形状・鳴き声を伴って記される動植物の、呪術的医
薬的効能の記載は、『山海経』編纂の最大目的であったと考え
る。

山経の記載は、前記のごとく要素の増減はあるものの、型に
則り整然と列記されている。前山との距離の数字は、その間に
一条全体の脱落があっても確認し得ない数値ではあること、ま
た清の注釈家郝懿行が『山海経箋疏』で、劉歆が校訂の際に山
経各末尾に山岳数と距離数を記した数値に、その異同を記して
いるが、山岳数は四山増加し、距離数も増していること、山経
全体の文字数も劉歆が一五、五〇三字と記すが、郝氏は二一、
二六五字と数えるなどのことから、山経からの文の脱落は有り
得ると思うが、あっても多くはないものと考ええる。佚文かと思
われるものの多くは、山経で言えば、Dの山の特記やE Fの
特筆される動植物鉱物に該当する記述であるが、その検討は、
海経と合せて行うこととする。

四 海經の記述法の特徴

『山海經』後半海經の最初の編、海外經南西北東四編は、それぞれの冒頭に、「海外自西南陬至東南陬者」のように、西南隅から東南隅までの地域の記録であるという記載をもち、その中の国名や特記事項を記していき、最末尾には、「南方祝融、獸身人面、乘兩龍」のごとく、その範圍を司る神名とその形状を記して一編を終る。西方の海外西經は「西方蓐收、左耳有蛇、乘兩龍」。海外北經「北方禺彊、人面鳥身、珥兩青蛇、踐兩青蛇」、海外東經「東方句芒、鳥身人面、乘兩龍。」で結ばれる。そして各冒頭の地域表示と末尾の統括神の記載との間に、国や特記すべき神・山・動植物・地域伝承が記される。更に注目すべきはそのそれぞれの記載に、前条との位置関係が記されていることである。例えば海外南經の初めの数条は次の如くである。

結匈国在其西南、其為人結匈。

南山在其東南。自此山來虫為蛇、蛇号为魚。一曰南山在結匈東南。

比翼鳥在其東。其為鳥青赤、兩鳥比翼、一曰南山東。

第二項目の南山は「在其東南」「南山在結匈東南」のように前条との位置関係が記される。位置関係の記述を伴わないものは、国名にはなく、前に記される国名の中に存在する事項、即ち動植物や伝承の記述ばかりである。このような特色をもつ海外經は、絵地図が先行し、その絵地図を文字化したものであるという説もあるが、書として記し留められた時のままを示しているものと考えられ、記載事項の脱落や挿入は考えにくい編である。

海内經四編は、一部に前後の記述の位置関係を示すものもあるが、海外經四編におけるような密接な関連を言うものではない。それぞれの事項が「何々の東にある」と言うように、知られていたであろう地名との関連で次々と示され、記述されたもの同士の間には触れないものが殆どである。海外經が絵地図のような図を文章化したものと言われるのに較べて、海内經は絵地図のような基づくものがあつたにせよ、中国の中心部に近い地域の記載として、知られている地名との関わりで述べることによつて進められているところに特色がある。例示すると次の如くである。

式負之臣曰危危。与式負殺饒竊。帝乃枯之疏属之山、桎其

右足、反縛両手与髮、繫之山上木。在開題西北。

大沢方百里。羣鳥所生及所解。在鴈門北。

鴈門山、鴈出其間。在高柳北。

高柳在代北。(海内西經)

鴈門・高柳という地は、現在の山西省代県の北側に存在することを記すものである。類書が『山海経』を引用する際、右のような位置表現は全て削除されるのが通例であるから、右のどの一文かが脱落しても、前後の違和感は少なく、復元場所を見出すのも困難を覚えるであろう。

大荒経四編の記述は、海外経・海内経より一段と条毎の関連が希薄で、個別化した表現である。「大荒之中有山」「有宋山者」などの形で書き出し、国・山、特記する神格や伝承を記している。大荒東経の末尾を例とする。

大荒東北隅中、有山。名曰凶犁土丘。応龍処南極。殺蚩尤

与夸父、不得復上。故下数旱。旱而為応龍之状、乃得大

雨。

東海中有流波山。入海七千里、其上有獸。状如牛蒼身、而

無角一足。出入水則必風雨。其光如日月、其声如雷。其

名曰夔。黄帝得之、以其皮為鼓、概以雷獸之骨、声聞五百里、以威天下。

記述相互の関連性が大層薄いので、脱落があっても知り得ない書きぶりである。

『山海経』一八編の最終巻である海内経一編は、内容上前半後半に二分できる。前半の内容は、国名・山岳名・河川名と特色ある動物植物の記述や伝承で構成されている。

流沙之東、黑水之間、有山名不死之山。

華山青水之東有山、名曰肇山。有人名曰柏高。柏高上下于此、至于天。

西南黑水之間、有都広之野、后稷葬焉。爰有膏菽膏稻膏黍膏稷。百穀自生、冬夏播琴。鸞鳥自歌、鳳鳥自舞。靈寿実華、草木所聚。爰有百獸、相羣爰居。此草也冬夏不死。

後半は、文化的事物の創始者の記述と、それに関わる系譜が

続く。

黃帝生駱明、駱明生白馬。白馬是為鯨。

帝俊生禺号、禺号生淫梁、淫梁生番禺。是始為舟。

このような文章が連なる海内經は、特に文相互の関連性が薄く、中間に脱落した文章があっても知る手懸りのない記載である。大荒經と共に佚文の復原先として最も可能性の高い編である。

五 佚文の考察

先に書籍毎の佚文かと思われる表現を示したが、ここで佚文か否かなどの検討を試みたい。前掲五三条を記述の中心的内容によって類別し、多くの類書が立てる分類、天・地・人事・樹木・獸等に倣って扱っていく。その文章を再掲せず、『芸文類聚』にある佚文ならば「芸」と略記し、その中を書の出現順に芸1・芸2として、当該の文章であることを示していく。『論衡』を論、『北堂書鈔』を北、『初学記』を初、『白氏六帖』を白、『太平御覽』を太として示す。

北2は「荒山・銅頭鉄額兵・天酒」を記す。「東南荒山」は、海經、中でも大荒經・海内經に類するもので、大荒之中・大荒東北隅・東海中などの形が多い中で、「東南」という方位のみの記載は、海内經に「西南有巴国」の一例がある。「銅頭鉄額兵」は現『山海經』に類似表現は見出せない。まず「銅鉄」の語は山經の産出する鉱物を記す部分に、「其陽多銅、其陰多鉄」の如き用例のみであり、「兵」は『山海經』には兵士の用例はない。兵の武器としての用例は「蚩尤作兵、伐黃帝」（大荒北經）と「応龍処南極、殺蚩尤与夸父」（大荒東經）の郭璞注に「蚩尤作兵者」があるのみである。この蚩尤が銅頭鉄額であったという伝承は、まだ『山海經』には見えず、後世のものである。なお、太14の「汲冢冢中得銅劍一枚……以錫銅為兵器」は、中次二經昆吾之山の条の「其上多赤銅」の郭璞注の文章であった。『山海經』の兵は他に「兵乱」を言うものが一九例あり、「有鳥焉。其状如雄雞、……見則有兵。」（西次二經鹿台之山）の如く、兵乱の予兆記事である。「天酒甘露也」は、表現の形からは郭璞の注の記述に類似する。西次四經鳥鼠同穴之山の「鱣魚」の注の「鱣魚大魚也」と同形であるが、「天酒」はない。天の何々という表現は、天帝と関わる事物に天字を添えたものが多く、酒を天帝の賜物と見たようでもない。「甘露」の

用例は、「鳳皇卵民食之、甘露民飲之。」(海外西經諸天之野)「鳳鳥卵是食、甘露是飲。」(大荒西經王母之山)の二例がある。従って北2の「荒山」の文は、現『山海經』の他の文章と類を異にしているものである。

氣象現象を内容とするものとして、芸1・太1・太2・太3・太7がある。芸1の「列欽雷名」は、先の「天酉甘露也」と同様の注記の表現に見える。雷に関する表現は、現『山海經』に三か所見られ、「雷沢中有雷神。龍身而人頭、鼓其腹。在吳西。」(海内東經)と先に大荒經の例文として挙げた流波山の變の記述、そして「黃帝妻雷祖生昌意。」(海内經)である。これら雷字の注にも「列欽」はなく、『山海經』の佚文とは考えにくい。風雨の記述である太1「扶陽之山多怪風。」と太3「將陽之山多怪雨。」は、西次三經「符陽之山多怪風雨。」を、類書編纂の際の「符・扶・將」「陽・惕」の文字異同、及び「多怪風雨」採用時、項目に適合させる為の、風項目での雨字の削除、雨項目での風字の削除の行われたものであろうと考える。『太平御覽』考察時、文字の異同の分類で処理すべきものであった。太2「太極山・溫水湯風」と太7「湯山湯水・愈疾」とは同一箇所の引用と思われる。表現の差異は類書引用の簡略化と項目へ適合させる為の改変と思われる。山名・河川名

共に現『山海經』に関連する記述を見出し得ない。この温水が病気を癒すことは、類似表現を山經に多く指摘でき、それらの記述から『山海經』が実生活に基づくものであることを示す証の一つなのであるが、一例を挙げてみる。「多鱈魚。其狀如鯉而大首。食者不疣。」(東次四經旄山)でその魚を食べると疣にならないと言う。このように山經での動植物の医薬的効能は大層具体的である。太7太極山の温水の効能の「疾」が傷、熱病などの意とすると『山海經』的であるが、病氣と広義の意であるとする『山海經』には適しない表現となる。

次に地理的事象のうち、初1・白1・太9の崑崙山の山容・流出する四川・流域を述べるものを見る。『山海經』で崑崙の詳細な記述は次の三条である。

西南四万里曰崑崙之丘。是実惟帝之下都。神陸吾司之。其神状虎身而九尾、人面而虎爪。是神也司天之九部及帝之囿時。有獸……。有鳥……。有鳥焉、其名鵲鳥、是司帝之百服。有木……。有草……。河水出焉而南流、東注于無達。赤水……。洋水……。黑水……。是多怪鳥獸。
(西次三經)

海内崑崙之墟在西北。帝之下都。崑崙之墟方八百里、高万

初。上有木禾長五尋大五開。面有九井、以玉為檻。面有九門、門有開明獸守之。百神之所在、在八隅之巖、赤水之際。非仁羿莫能上岡之巖。赤水……。河水出東北隅、以行其北、西南又入渤海、又出海外。即西而北、入禹所導積石山。洋水黑水……。〔海內西經〕

西海之南、流沙之浜、赤水之後、黑水之前、有大山。名曰崑崙之丘。有神、人面虎身、有文有尾皆白、処之。其下有弱水之淵環之。其外有炎火之山、投物輒然。有人戴勝、虎齒有豹尾穴処。名曰西王母。此山万物尽有。〔大荒西經〕

初1及び太9の「縦広万里、高万一千里」は、海内西經の「方八百里、高万仞」と重ならず、初1太9「河百里一小曲、千里一大曲」と白1「千里一曲、九曲入海」とは、中次三経青要之山の「実維帝之密都、北望河曲」に付された郭璞の注の「河千里一曲一直也」を『山海經』として引用したものである。また太9「復潜行地下南出積石山」は、海内西經「禹所導積石山」や西次三経不周之山の「河水所潜也」の郭注「已後潜行、南出積石山、而为中国河也。」を採ったものと思われる。類書の崑崙山がその地理的要素を項目に該当するものとし

て挙げるのに対し、元来の『山海經』が伝えようとするものは、天帝の下都、司る神格、山中の莊嚴さといった理想的境地の伝承である。書の性格の異なる類書と対比して、『山海經』という書の特色が明確に感ぜられる。

崑崙山以外の地の河川の引用は、初2・太6・太10・太11・太12・太13の六条がある。初2は長江の水源として大江・中江・北江・岷山を記す。中次九経岷山に「江水出焉」とあるものや海内東経「岷三江首大江、出汶山。北江出曼山、南江出高山。」などを利用したものであろうか。『山海經曰』とするほどの関連と認めにくいものである。太6「祭水・伏流」の伏流の表現は、『山海經』も郭注も「潜行」と表現されるもので、違和感を覚える。太10「又曰、詩云」の「又曰」は前条の「山海經曰」を受け、続いて同じく用語であるが、「詩云」と明記するように『詩経』衛風「淇奥」の「瞻彼淇奥、緑竹猗猗」が引かれているが、現『山海經』には北次三経沮洳之山に「瀑水出焉」とあるその郭璞注に「音其」とあるのみで、この音注に続けて衛風淇奥を引用していたのであろうか。郭璞が『詩経』を引くのは、西次四経上申之山の「多榛楛」に、大雅「旱麓」の「榛楛济济」と、北次三経沮洳之山に、魏風「汾沮洳」の「彼汾沮洳」、大荒北経「叔均乃為田祖」に、小雅「大田」の

「田祖有神」との三か所である。

太11は、「壇道山・鶯漿水・良葉」を言うが、山名・水名共に『山海經』に関わりを見出せない。「良葉」の語は、現『山海經』にはなく、多くの病名を挙げて効く薬物の動植物名を具体的に表現していく。抽象的な「良葉」の表現は『山海經』には見られない。葉字の使用例は海經、海内西經で十巫が「夾竈竈之尸皆操不死之藥以距之」、大荒南經巫山に「帝葉八齋」、大荒西經での十巫「從此升降百葉爰在」の三か所である。

太12「金玉・沮水」、太13「甘松嶺・松桑嶺・江水水源」の二条は『山海經』に関連する内容や手懸りを見出し得なかった。

太4・太5・太17は、周の穆王の伝承で、崑崙山や西王母との宴も記す。先に『山海經』中の崑崙山の詳細な記述で示したように、周の穆王は全く記載されていない。また西王母は、山經では崑崙山から西へ一三二〇里離れた玉山の山岳神で、「其状如人豹尾、虎齒而善嘯。蓬髮戴勝。是司天之厲及五殘。」と記される。この異形は詩の応酬をする西王母とは大きく異なる。海經になつて西王母は崑崙山の神として記されるがやはり穆王と会見する美神ではない。穆王の西王母との伝承は、戦国魏の襄王の墳墓中から、晋の太康二年（二八一）に発見された

所謂『穆天子伝』に記される文章である。「山海經曰」として引用される理由として考えられるのは、西次三経玉山の西王母の「是司天之厲及五殘」に添えられる郭璞注に、「穆天子伝曰、吉日甲子、天子賓于西王母。」として、以下天子と西王母との歌の贈答まで引用されているものを、『太平御覧』は「山海經曰」として引用したことが考えられる。郭璞の注を『山海經』本文と一体として扱っていることを知る。

山岳では太8「大翻山小翻山、秦人王仲の転生」がある。山名も転生も『山海經』に手懸りを見出し得ないが、転生は『山海經』中の転生記事と異なり、後の時代の話型である。中次七経姑婦之山の「帝女死焉。其名曰女尸、化為菰草。其葉胥成、其華黃、其実如菟丘。服之媚于人。」や北次三経発鳩之山の炎帝の少女女娃が精衛という鳥に転生する話と比較してのことである。⁴⁾

山岳名の示される引用は他に、初3・初4・太20・太23・太28がある。初3「丹山・巫山・帝女」の丹山は、海内南経夏后啓と大荒北経始州之国にあり、巫山は大荒南経帝葉八齋と大荒西経巫山と夏耕之尸の三か所にあるが、いずれも帝女との関わりがない。帝女は太8の転生で挙げた二例と中次十一経宣山の帝女之桑と中次十二経洞庭之山の帝之二女がある。しかし山名

丹山・巫山と関わらない。初4「雲山・乾腊梅」で、中次十二經の雲山は桂竹という猛毒の植物を記し、梅はない。梅は山經の「多桃李梅杏」の類は多いが乾腊という梅干に類する梅の記載は見当たらず、関連する事項も見出せない。太20「克光之山・鉄」は、「其陰多鉄」（西山首經竹山）の如く山中の産出物を言うものを指すと思われるが、鉄の記される四字の山名を「之山」を省き、「西三」で西次三經の記述であることを示し、列挙してみる。西皇（西三）・潘侯（北首）・白馬（北三）・泰威（中首）・夸父（中六）・少室（中七）・大騶（中七）・虎尾（中十）・又原（中十）・帝囷（中十二）・兎牀（中十二）・風伯（中十二）・洞庭（中十二）・王母（大荒西）の一四山で、更に二字の山名中鉄を言うもの二三例と計三七例のうち、克光之山と字形や音の類似するものは見出し得ない。太23「滌光之山・彘」の彘は「其獸」何々という形で、綸山（中八）・大堯之山（中八）・崑山（中九）・玉山（中九）・葛山（中九）・即谷之山（中十二）の六山に記される。彘という兎に似た動物を言う六山に字形や音の類似は求めにくく、佚文と思われるが、記述が中山經に集中している点、先に触れた如く山經からの文の脱落は多くないと考えるので、文字表記など他の理由によることも考えられる。太28「單狐之山其木多机。」は北山首經の「北山經之

首曰單狐之山。多机木。」とあるものの引用であるが、先に『太平御覽』の調査に際して見落としていたものである。山岳の記述は他に『論衡』の度朔山の伝承があるが、最後に扱うこととする。

『山海經』が編まれた大きな目的の一つに中国の周辺地域の人々や土地の状況を知り、記録することがあったと考える。記録者・伝承者にとって、その存在や生活ぶりは大きな関心事であったことと思う。類書に採られる、人に関する記載のうち、現『山海經』に見られないものは、芸2・太15・太16・太18である。

芸2・太15は、反舌国という種族の記録で、「其人反舌」がいかなる状態を表現したものであるのか未詳であるが、類似した記載は海外南經の「岐舌国在其東」がある。直前に「不死民」があり、その東にあるとだけ記す。郭璞は注して「其人舌皆岐或云支舌也。」とする。海外經に多い異形の多くは外見上の特徴で、三身・三首・一臂・長股・一目などの国々であるが、岐舌国は口中のことで言語に関わる外見だけではない特徴を言うもので、他と若干趣きを異にしている。海外經は記述相互の関連が極めて密接であることは前述したが、次のようには考えられないだろうか。海外經と大荒經は若

干重なる記載を有している⁵⁾。海外南経の載国・不死民・羿与鑿齒戦于寿華之野・狄山帝堯葬于陽と大荒南経の載民之國・不死之國・鑿齒羿殺之・帝堯帝嚳帝舜葬于岳山とは相重なる部分である。海外南経の岐舌国と重なっていた大荒南経の言語口中の特徴をもつ「反舌国、其人反舌」が脱落する前に、唐の『芸文類聚』に採られていたものではないかと、と。太16「野人国、面目手足尽異」に類する記載は、海内北経「王子夜之尸、兩手兩股胸首齒、皆斷異処」であり、「尽異」と「異処」とは同一の状態の表現と見られないだろうか。ただ王子夜之尸という神人と野人とは現状では結びつかない。王子夜之尸に何か物語があったのかと想像するのみである。太18「域有山・域有民・食桑・射蜮是食」は、大荒南経の「有蜮山者、有蜮民之國。桑姓食黍、射蜮是食」の引用であろう。有何々と海経で記す「有蜮山」が誤記引用され「域有山」となり、「有蜮民之國」が「域有民之國」となったものであろう。海経の国名の「域有民之國」という五文字表記は他にないことも証とできよう。『太平御覽』考察の際の見落としてである。

太19「珥二玉相合、瑁琬。夷蜚係耳玉也。」「山海経」には多く玉が記載され、その多くは山中に産出することを、「無草木多金玉」(西次二経薰風之山)のように記す。玉の名は、「其上

多嬰短之玉、其陽多瑾瑜之玉。」(西次三経湖山)の如く記される。西次三経崑山には「玉膏」を黄帝が食する記述もあるが、珥は見えない。「夷蜚係耳玉」は夷蜚の風俗を記すもので海経の内容であろう。海経は中央から遠い辺境の地の記載であるが「蜚夷」に類する表現は全くない。大荒経に記される最遠の地に、堯舜の被葬地の所在が記録されるなど、大荒は地理的位置の辺遠を示し、その地の異形や異風俗を記しても、中央と対比して蔑視する表現はない。太19は『山海経』の文章とは考えにくい。

植物に関する記述として、芸3・芸5・芸6・太29・太30がある。芸3に言う「菖蒲」は『山海経』全編を通して他にない。「一十九節」以下の表現は『山海経』の書きぶりではなく「韓終王興所服」も関与しない。葉となる植物を多く記すが菖蒲は見られない⁶⁾。手懸りを求め得ない引用である。芸5「所謂賁禺之桂」は、南山首経招搖之山の「多桂」に付された郭注「呂氏春秋曰、招搖之桂」に関わるかとも見えるが、招搖・賁禺は相似ない。芸6「桂生南隅、」云々は、郭璞の『山海経図讚』南山経の「桂」の句である。隅・裔、拔萃・枝華、熙・莫熙、陵・凌、秀津・津、と文字の異同はあるが、郭注だけでなく図讚も含めて『山海経』としていたことを知る。『芸文類聚』

考察の際、思い至らぬ見落としてある。太29「楠樹生蜀中、七八月吐穗」の蜀中。七八月の二語は、『山海經』に類のない表現法である。太30「竹生花其年枯」以下詳細な記述は『山海經』本文の筆法ではなく、注記かと思われる。「多竹」の一二か所全て、既知の植物として注記はない。特記される竹は、「帝後竹林在焉、大可为舟。」（大荒北經）があるが、ここの注でもなく郭注はその大きさの補充説明をしている。

鳥類の引用は、論2・太25・太26がある。論2の「重常之鳥」は劉歆の「山海經攷録」に、東方朔が鳥の名称・餌を『山海經』からの知識で答えたと伝える話を、『論衡』が董仲舒のこととして記すものである。『山海經』中、動物の餌を記すのは「多鰩魚、其状如蛇而四足。是食魚。」（西次三經渠游之山）、「有鳥焉、其状如雉、恒食蜚、名曰鳩。」（中次十一經瑤碧之山）の二条と、人間を食う「食人」が山經に八、海經に三例ある。食人は別として、東方朔の鳥となると鳩ということになるが名称が一致しない。太25「鷲雉一名山雞、養之稊火。」は、西山首經小華之山に「鳥多赤鷲、可以禦火。」があり、郭璞注に「赤鷲山雞之屬」とあるものを取ったのであろうか。太26「鸚鵡慧鳥」は郭璞の『山海經圖讀』西山經鸚鵡を採ったもので、藥—桑、啄地—以觜、の異同、及び末尾二句の省略が行われて

いる。先の考察時の見落としてある。

獸の引用は白2・太21・太22・太24・白3である。白2「猪大者肉重千斤」、太21「肉重千万斤豪猪」に関わる記載は、西山首經竹山の「有獸焉。其状如豚而白毛、大如筭而黑端。名曰豪豨。」及び郭璞注「狙猪也」が挙げられる。清の郝懿行は白2はこの部分の郭注の脱落であろうと言う。豪猪・豪豨・狙猪の手懸りしか得られない。太22「果然・以名自呼声」の鳴き声の表現は、山經で「其鳴自叫也」と記され、叫字が呼・諂・訕・号と変化はするが、呼声という表現はされない。類書採用時に意を明らかにする為の声字の補充ということは考えられる。交趾以下の叙述は注の文と見られる。太24「狸狻」は全く手懸りが得られない。白3「騊虞・如虎・五色・尾長如身・出鳥鼠同穴山」の要素は、海内北經林氏国に「有珍獸。大若虎五采畢具、尾長于身。名曰騊吾。乘之日行千里。」とあるものによったと思われる。鳥鼠同穴山は、西次四經も海内東經も騊虞と全く関わらない。

次に蟻・蛟の芸7・芸8を見る。芸7「蛟・小頭細頸・有白癭・瓮能吞人」の引用は、中次十一經冀望之山の「其中多蛟」に添えられた郭璞注であった。「似虵而四脚小頭細頸、有白癭。大者十数围、卵如一二石甕、能吞人。」と若干文字の異同はあ

るが郭注の引用であった。先の見落としてである。芸8「朱蟻・崑崙壚」の引用は、崑崙の本文及び郭注も全て朱蟻と関わらない。どの部分からの脱落かも探る手懸りを得ない。

魚類は、北1・初8・太27・初6・初7がある。北1・初8・太27の要素は「鯪鯉・吞舟・有刺・如三角菱」で、海内北経に「陵魚人面手足魚身。在海中。」とあるが、郝懿行はこの郭注が脱去したものと見ている。初6「鰕魚・大口・細鱗・斑彩」は、中次七経半石之山の「多臚魚。状如鰕、居遼。」の郭注「鰕魚大口大目細鱗有班彩」を引用したものであった。初7「鯪魚・赤目・赤鬣・食之殺人」に関わる手懸りとして「食之殺人」の記述を見ると、「其中多師師之魚、食之殺人。」（北山首経少咸之山）、「其中有師魚。食之殺人。」（北次三経饒山）の二例がある。師師・師魚共に郭注は、「音沛、未詳、或作鮪。」「未詳、或作鮪。」とするのみである。関わりは見出し得ない。

佚文考察の最後として、論1・芸4・初5に共通する度朔山の大桃樹を見ることとする。論1の書き出し「蒼海之中」について、海経の書き出しが「東海之外」の類を代表として、東西南北四方の称呼、又は「大荒之中」に限られている中にある「蒼海」は珍しい形である。「度朔之山」及びそれに類する

山岳名は見出せない。「大桃樹」の中心的描写である「屈蟠三千里」に類する記述は、「尋木長千里、在拘纓南生河上西北。」（海外北経）と「大荒之中、有山名曰衡天。有先民之山、有檠木千里。」（大荒北経）とがあり、清の郝懿行は度朔山の記述が後者部分からの逸文であるとの考えを示している。『山海経』本文とすると、有檠木千里とどのように連なるのか疑問があり、注記すると晋の郭璞ではない注は、他に例もない。九五文字にも及ぶ度朔山の伝承が、どのように『山海経』に記され、どのように脱落したものか、想像すら難しい。「神荼・鬱壘」という神人について見ると、『山海経』の神人は、山経では山岳神・海神・風神などで、「神計蒙処之。其状人身而龍首、恒遊于漳淵。出入必有飄風暴雨。」（中次八経光山）のように、自然現象と関わりを示す神格に満ちている。海経では簡潔な特徴を記される多くの神人の他に、長めの物語をもつ神格も多い。その詳述される神格の物語は奥に部族の抗争を示すと思われるものや素朴な事物起源を語るものであったりする。人々が切望する世と人の平穏に関わる点は度朔山の悪鬼を統べる二神人と重なるけれども、その内容・表現が至って素朴なところに違いを覚える。「鬼」についても『山海経』に五例あり、1. 瑾瑜之玉為良……天地鬼神是食是饗（西次三経崑崙山）、2. 槐

鬼離命 3. 有窮鬼（共に西次三經槐江之山） 4. 鬼草（中山首經牛首之山）、5. 鬼国（海内北經）である。2・3は山岳神名、4は植物名、5は「鬼国在式負之尸北。為物人面而一目。」とのみ記されるもの。度朔山の惡鬼に類する鬼の表現は見られない。黄帝以下の記述は『山海經』よりも後の時代の信仰に基づく記述と感じる。度朔山の伝承を研究された諸先人のうちの一論文を引用させて頂く。上原淳道「神荼・鬱壘について」である。

ある説話がある時代の文獻に見えないことは、必ずしもその説話がある時代に存在しなかったことを意味しないけれども、先秦から前漢にかけての文獻に見えない神荼と鬱壘との説話が、後漢に入ると突如として多くの文獻に記されるようになるのは、この説話の成立年代に関して何事かを暗示しているようである。この説話は、後漢の時代に儼の行事の一部として行われていたころの、桃人を飾ること、葦索を垂らすこと、神荼・鬱壘および虎を門に画くこと、などの一聯の風習の起源を説明するために作られたものと考えられるが、（以下略）。

先秦の古書と見られる『山海經』に、何故度朔山の伝承が記載され、どのような経緯で佚文となったのであろう。考古学上の発掘が得られ、明らかにする時を期待するが、敢えて論拠のない想像が許されるならばと記してみる。古く『山海經』は「黄帝書」「禹書」と黄帝や禹と関わる書と見做されていた。黄帝が制度とし人々の幸せを図った度朔山の伝承を記す書物・記述を、人々の願いの記される『山海經』と見た、と。

六 まとめ

前漢末の劉歆が校訂して現在の一八編とし、晋の郭璞（二七六—三三四）が最初に注釈を施したものが、現在手にする『山海經』であるが、明清の注釈家達が見るまでに、本文に異同の生ずることはなかったのかなどの状況を知るべく、先に、『論衡』『水経注』『北堂書鈔』『芸文類聚』『初学記』『白氏六帖』『太平御覽』の中に「山海經曰」として引用されている文章を、現『山海經』と比較検討をした。そして現『山海經』の中に見出し得ないと見た五三条を本稿でその記述を内容別に検討を加えた。

先の調査で、本文の文字異同に気づき得なかった七条と、郭

璞の山海経注、及び山海経図讀を「山海経曰」として引用していた一一条との計一八条は確認し得たが、残りの三五条は、種々手懸りを求め模索したが、明らかにし得なかった。これまでの結果を分類し一覧にして示しておく。

1. 文字異同はあるが『山海経』本文であるもの——初
2・白3・太1・太3・太18・太25・太28
2. 郭璞の注であるもの——芸7・初1・初6・白1・太
4・太5・太9・太14・太17
3. 郭璞の山海経図讀であるもの——芸6・太26
4. 元来、『山海経』にあった文とも考えられるもの——
芸2・太15・太16・太21
5. 内容・表現から『山海経』の文であったと思われるもの——
論1・北2・芸1・芸4・初5・太2・太
7・太8・太10・太11・太19
6. 手懸りなく確認し得ないもの——論2・北1・芸3・
芸5・芸8・初3・初4・初7・初8・白2・太6・
太12・太13・太20・太22・太23・太24・太27・太29・
太30

考察の途中、考古学上の発掘を待たねば、結論の得られぬ無

謀なことに取り組んでいるという躊躇困惑があったが、繰り返し文字・表現を求めて見返すうち、これまで漠然と感じていた『山海経』の諸々の特色、特に文章表現の特色を意識する機会となった。それは特記する程のことではないのであるが、恩師藤野岩友先生から卒業論文の課題として頂いた『山海経』調査作業の、最終としての本稿に機会を頂いた感謝をこめて記しておきたい。

文章表現の特色として、洛陽を中心とする山経は、人々の生活に恵みを齎す山岳への思いや山岳神祭祀の法が一定の型に則り、整然と、そして素朴に記される。山経と同心円的に広がるその外周の海経は、そこに住む人々への強い関心から実情と伝承を記している。特に海外経や大荒経は奇異な民や事物、風俗が記されるが、その描写態度には、それらを蔑視する語気が全くない。中央からの者が遠方の地の事物を記録したとすると、その態度の公平さは驚く程であるし、また各地の者がそれぞれ報告する形で記したものを、中央の編纂者が纏めたとすると、その筆力は大層優れたものであると言える。

人々の大きな願いである健康と日々の生活の安寧に関わる諸事、例えば薬となる動植物の記載が大層具体的であることなどから、この書が司馬遷に「至禹本紀・山海経所有怪物、余不敢

言之也」と退けられる「三身国・三首国」などの異形も、人々の信仰やその地の風俗と関わる実情を記したものと感じている。このような社会に益を及ぼさぬ勉強が許され、それに従事する人々が絶えない世の続くことを祈りながら、筆を擱きたい。

注

- (1) 拙稿「『論衡』と『山海經』——「鬼門・神荼・鬱壘」の記述を中心として——」『國學院雜誌』第一〇六卷十一号 平成十七年 『水經注』所引『山海經』考『新国学』復刊第六号 平成二十六年 『北堂書鈔』所引『山海經』考『新国学』復刊第七号 平成二十七年 『芸文類聚』引『山海經』考『新国学』復刊一号 平成二十一年 『初学記』引『山海經』考『新国学』復刊第二号 平成二十二年 『白孔六帖』所引『山海經』考『新国学』復刊第五号 平成二十五年 『太平御覽』所引『山海經』考『新国学』復刊三号 平成二十三年
- (2) 拙稿「『山海經』における表現の考察」『東洋文化』復刊第九十五号 平成十七年
- (3) 拙稿「『山海經』における植物観」『國學院女子短期大学紀要』第二号 昭和五十九年 『山海經』の基礎的研究 第二章第二節所収 笠間書院 平成七年
- (4) 拙稿「『山海經』を中心とした中国神話の考察」『學苑』昭和六十二年一月号 『山海經』の基礎的研究 第三章第十節所収 笠間書院 平成七年

成七年

- (5) 拙稿「『山海經』の山經と海經」『學苑』平成四年一月号 『山海經』の基礎的研究 第一章第一節所収 笠間書院 平成七年
- (6) 注3に同じ。
- (7) 上原淳道「神荼・鬱壘について」『東方宗教』第一卷 昭和二十六年